

歴史館まなび隊

1

縄文のムラ（諏訪郡原村阿久遺跡）



ここでは、今から6,000年前の縄文時代前期、八ヶ岳の麓^{やつがたけ ふもと}にあったムラのように再現しています。森をまるく切り開いて、立石・列石^{りっせき れっせき}（実物の60%大）を中心に堅穴住居^{たてあなじゅうきょ}や床を高くした建物（実物の70%大）、集石（実物の60%大）などを配した風景が広がっています。

八ヶ岳の山頂部はすでに新雪が積もり、その下は緑の針葉樹^{しんようじゅ}、さらに下ると紅葉した広葉樹^{こうようじゅ}を見ることができます。収穫の秋、縄文人が集まって秋の盛大な祭りが終わって、しばらくした静かな秋の夕暮れです。

当時の人びとは、地面を掘り^{くぼ}窪めて床をつくり、穴を掘って柱を建て、その上の屋根をカヤなどの植物を材料に葺^ふいた堅穴住居^{たてあなじゅうきょ}で暮らしていました。展示室の堅穴住居は、諏訪郡原村阿久遺跡^{あきゆういせき}（国指定史跡）の発掘調査をもとに復元したもので、建築材にはクリ、ミズナラなどの広葉樹が使われています。

この家の家族は夫婦と小さい子ども二人の四人です。父親と息子は八ヶ岳の山麓^{さんろく}にシカ^{りょう}猟に出かけ、母親と娘も近くの小川に洗い物と水汲み^{くみ}に出かけているので、今この家は留守なのです。



のぞいてみよう竪穴住居の中

さが 探してみよう!?

下の写真は、竪穴住居の中や周りで見つけることができるよ。どこにあるのか探してみよう。

②～④は、竪穴住居の中だよ。



イタチ



ドングリ団子



柄付打製石斧



燻製にされたイワナとヤマメ

豊かな山の幸

6,000年前、縄文時代前期の東日本には、ドングリやヤマグリなど、実をつける木々の森（落葉広葉樹林）が広がっていました。

木の実やきのこ、ヤマノイモなど植物の食料採取を中心にして、秋にはサケ漁、冬には鳥や獣の狩猟などをして暮らしていました。

竪穴住居の中には、クマ、ニホンジカ、カモシカの毛皮が敷かれています。炉の中には火にかけた土器の中でヤマグリがゆでられています。夕食の準備をしているのでしょうか。炉の脇の浅い鉢にはドングリ団子にイノシシの肉などの煮物が盛られています。

炉のまわりには、ドングリなどを割る台石とたたき石、それらを粉にする石皿とすり石などがあります。炉の上の火棚には川魚の燻製やへびの干物もあります。

柱周辺には、狩に使う弓と矢、シカの角で作った釣針、天蚕糸から作った釣糸のついた釣竿、木を切るときに使う刃先に磨きをかけた石斧、家の修繕などに使うフジ、アケビ、ヤマブドウのつるやそれらで作られた籠など日常生活の道具があります。

さまざまな食事や道具から、縄文人の豊かな生活を実感できます。

見つけたら口の中に○をしてみよう。他にもたくさん道具や動物が発見できるよ。